

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
1 生徒一人ひとりの能力に応じたきめ細かな学習指導により、基礎学力を養い、学校全体の質の向上に努める。	① 基礎学力の定着に向け、各教科で「授業がわかる」と生徒が思う授業づくりの工夫をする。	授業が理解でき、基礎学力が向上していると思う 生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	A 91% 【H30.7A 91%】 【H29A 91%】	教員が生徒の反応を見ながら、生徒の実態に応じた教材を選定し、生徒にとって「わかりやすい」・「取り組みやすい」ワークシートの準備など、日々の授業展開・内容を工夫している結果といえる。また、習熟度別授業により状況を把握しやすく、加えてサポート教員の支援が的確なことも、生徒たちが自分の基礎学力が向上していると感じている要因と思われる。今後も「授業がわかる」と生徒が思う授業作りを行っていきたい。
	② 授業力の改善や教員としての資質の向上を図るため、校内研修を充実するとともに、校外への研修に参加する。	校内外への研修に6回以上参加した教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	B 82% 【H30.7D 36%】 【H29D 25%】	校内外の研修に積極的に参加したことで、達成度判断基準がB評価になったと思われる。今年度は特に、定時制通信制高校の連携による研究授業の本校教員の参加率が高かったため、来年度もこの研究授業の参加をより積極的に促していきたい。
	③ 生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、ICT機器等を効果的に活用し、授業改善に努める。	ICT機器を積極的に授業で活用していると思う生徒の割合が A 75%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	C 55% 【H30.7C 53%】 【H29A 93%】	授業において積極的に活用している教科がある一方で、プレゼンテーションソフトを使った教材を頻繁に作る事が困難で、タブレット端末を使用した授業実践を行うスキルを持たない科目がある。使用頻度の差が大きい現状があることから、次年度以降は校内研修会を計画・実施するだけでなく、授業においてどのような活用をしているか、その効果的な活用実践を、普段から積極的に情報交換していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	ICT機器の活用は、これからの社会には必要なものであり、時代の流れに合わせた指導を今後もしていただきたい。①、②については、高い評価が出ている。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	生徒は、ICT機器をもっと活用して欲しいと思っている。教員のICTに関するスキル向上を図り、授業で充分活用していけるよう、研修会等を実施していきたい。基礎学力が向上していると思う生徒の割合が91%と高いが、一方で、9%の生徒は授業わからないと感じている。この9%の生徒はどこがわからないのかを分析をして、対応策を講じ、基礎学力向上に努めたい。			
2 基本的生活習慣を確立するとともに、いじめや暴力行為等の未然防止の取組を充実し、規範意識の向上を図る。	① いじめや暴力、携帯電話等を介した不適切な書き込みの未然防止のため、集会や研修等の充実を図り、落ち着いた学習環境を整える。	いじめに関する苦情・相談件数が A 0件である。 B 1件である。 C 2件である。 D 3件以上である。	B 1件 【H30.7A 0件】 【H29B 1件】	生徒は「いじめや暴力、スマホ・携帯電話等に関するトラブル回避に努めている」、保護者は「いじめや暴力に対して適切な指導がなされている」とアンケートではそれぞれ高い評価の回答を得た。「いじめに関するアンケート調査」で、1件紛らわしいものがあった。この件については、当人同士の行き違いによるもので解決された。次年度は例年以上に全職員でアンテナを敏感に張り巡らせて、生徒相互の関係の正確な把握に努めたい。
	② 服装や行動様式に関して適切に実践できるよう、個別指導を充実する。	服装や髪型等のきまりを意識して行動していると思う生徒が A 95%以上いる。 B 85%以上いる。 C 75%以上いる。 D 75%未満である。	A 98% 【H30.7A 98%】 【H29A 95%】	生徒自身が思う規範意識は高い値だった。生徒全体が「きまりを意識した行動」が取れるようになってきている。しかし、数名の生徒が7月期・12月期を通して高校生らしい身だしなみに意識が向かなかった。このような生徒に対し、指導の工夫を検討したい。今後は、全体の高い評価に満足せずさらに質の高い指導を追求していきたい。
	③ 基本的生活習慣を確立するため、家庭との連携を密にするとともに、朝食摂取習慣の定着を目指し、指導を工夫する。	朝食を毎日食べる生徒が A 80%以上いる。 B 70%以上いる。 C 60%以上いる。 D 60%未満である。	B 78% 【H30.7B 79%】 【H29B 64%】	前期までは、基本的生活習慣を調査したヘルスチェックアンケート結果では、生活習慣の水準がかなり高い状態で推移していた。しかし、9月に入り卒業生の進路が早々に内定することで、4年次生の気の緩みが顕著となり、生活態度が乱れた。それが、他学年にも影響を与えた。次年度は、進路が内定した卒業予定者への声かけを多くして生活習慣を乱れさせないようにしていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	いじめはどこの社会にでもあるが、数値を見ると、最小限で抑えられていると思うので、安心だ。育ち盛りの子たちが、朝食を78%しか摂らないのは、夜更かしなどがあると思う。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	毎日朝食を摂取するためには、保護者の食に対する意識を高める必要がある。保護者に、食育を啓発するリーフレット等を作成し配布する。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
3 教育活動全体を通じて主体性やコミュニケーション能力等の社会性を身に付け、社会人として必要な基礎能力を育む。	① 生徒が自主的に活動し、自分の考えを発言できるよう、授業にアクティブラーニング等を積極的に取り入れられる。	授業中、自分の考えや意見を述べることでできる生徒の割合が、 A 85%以上である。 B 75%以上である。 C 65%以上である。 D 65%未満である。	A 85% 【H30.7A 85%】 【H29A 86%】	全校生徒が少人数ということもあり、生徒一人ひとりが授業中に指名される回数も多く、自分の考えや意見を表明する機会に生徒たちは恵まれている。そのため、アクティブラーニングを取り入れた授業にも抵抗なく参加できている。一方で、自分の意見をうまくまとめて話すことに関してはまだまだ苦手意識が強い。次年度も引き続き生徒が主体的に活動する場面を多く取り入れた授業を実践し、自分の思いを自分の言葉で表現できるコミュニケーション能力の一層の向上を目指していきたい。
	② 定通大会、体育祭、文化祭、球技大会等において、他の課と協働して、生徒一人ひとりが主体性を持って取り組み、自己有用感と協調性を高める工夫をする。	定通大会、文化祭、球技大会等の各種行事に、積極的に取り組んだ生徒の割合が A 95%以上である。 B 85%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	B 93% 【H30.7A 100%】 【H29A 98%】	7月期のアンケートでは、100%の生徒から高い評価を得られたが、後期の12月期のアンケートでは、1年次生で1人、3年次生で2人が各種行事に「あまり積極的に取り組むことができなかった」と答えている。後期に行われた、体育祭や学校祭、球技大会の内容を検討し、100%の数値をめざしたい。今年度は各種行事に欠席する生徒が少なく、1月の球技大会では、全員の出席があり、生徒が積極的に取り組む姿が見られた。次年度はさらに生徒一人ひとりが積極的に行事に参加できるより一層の工夫・改善に努めたい。
	③ 安全安心な学校づくりの環境としての避難訓練等の行事において、生徒が意義を理解し主体的に今後に生かせるように指導する。	振り返りで課題を検討できた生徒の割合が、 A 95%以上である。 B 85%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	B 85% 【H30.7A 96%】 【H29A 98%】	今年度は、7月上旬の校内防災訓練（火災）と7月中旬の県民一斉防災訓練（地震）、12月中旬の校内原子力防災訓練を実施した。防災訓練は、緊張感を持って参加し、消火活動訓練も意欲的に行っていた。しかし、県民一斉防災訓練（シェイクアウトいしかわ）では、緊張感がなかったように思われる。その反省を元に、校内原子力防災訓練は音楽室まで緊張感を持ち迅速に避難した。生徒は、しっかりと振り返りができ、次の行事につながっていると感じられた。
学校関係者評価委員会の評価		社会に出ると、自分の意見をはっきり言わなければならない場面がある。その点、少人数ということで、生徒の指名回数が多いのは良いこと。今後も、こうしたコミュニケーション能力の向上を育む教育をお願いしたい。大会成績の看板を見ると、全国・北信越・県定時制通信制高等学校体育大会での活躍がわかり、子供たちの頑張りがわかる。結果は素晴らしい。避難訓練で生徒が意義を充分理解できず主体的に行動できなかった事は、生徒たちの緊張感のなさや意識に問題があると思われる。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		定時制通信制高等学校体育大会や学校行事など掲載してある「羽松高だより」「文集・潮風」等を、学校評議員や学校関係者評価委員会、PTA等に郵送して本校の教育活動を宣伝し、生徒の自己有用感の向上につとめたい。避難訓練は、大切さを伝え、万一の時は、安全・確実に避難できるよう指導していきたい。		
4 キャリア教育を推進し、就労意識を高めるとともに、一年次からの進路指導を充実し、卒業生徒全員の進路実現を目指す。	① 各学年ごとに、進路行事を計画的に実施し、進路意識の向上を図り、各自が進路目標を決定する足がかりにする。	具体的な進路目標を持っている生徒が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	B 83% 【H30.7B 81%】 【H29B 88%】	12月期アンケートでは、1年次生と4年次生に1人ずつ「将来の進路について全く考えられなかった」。2年次生に2人、3年次生1人「あまり考えられなかった」と答えた生徒がいた。計画された進路行事にどのような姿勢で挑むか、総合的学習の時間やHR活動におけるシラバスにそった将来にむけた進路学習をどうやって繋げていくか、課題である。次年度は、進路意識の向上につながる行事を計画的に行っていきたい。
	② 生徒および保護者の進路志望を実現するため、関係機関との連携を密にし、生徒の能力・適性を生かした進路決定に努める。	進路実現率が A 100%である。 B 90%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C 80% 【H30.7D 53%】 【H29B 91%】	15名の卒業予定者のうち、14名の進路が決定（内定）した。残り1名は、進路実現に向けての意識付けに時間がかかった。今年度の最終進路実現率は、93%だった。次年度は、今年度以上早期に進路指導に取り組み、100%をめざしたい。
学校関係者評価委員会の評価		進路目標を持っている生徒83%という結果は、しっかりと考えている生徒が多いと思う。これは、先生方の努力の賜物である。しかし、生徒たちは自分の適性に悩んでいる部分もある。そこへ少し手を差し伸べて欲しい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		具体的な進路目標設定は、入学したばかりの1年生もアンケート調査を通して設定している。今後は、アンケート調査内容を精査したり、興味のある職種のインターンシップができるよう手配したり、具体的な進路目標を立てられるよう努めたい。生徒の視点に立った進路実現を実施していきたい。また、社会で生きていける方向付けを学校で実施していきたい。		

5 教職員の多忙化改善を目指す。	① 教職員の働き方について、地域やP T Aに理解いただき、適切な協働で効率的に校務分掌業務を遂行する。	教職員の多忙化改善に取り組んだ教職員が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	B 88% 【H30.7B 80%】 【H29実施なし】	社会の情勢をうけ、今年度から項目に加えた。平成30年度前期と比べ後期は、先生方の多忙化改善意識が少し高まったように感じている。保護者懇談会時には、石川県教育委員会から出されたリーフレット「学校現場での働き方の見直しを進めています」を配布し、保護者に理解を求めた。今後は、多忙化改善のため業務分担を明確にし、効率的な校務運営を行い、多忙化改善に努めたい。
学校関係者評価委員会の評価	多忙化の改善に取り組むのは当たり前で、日常生活にメリハリをつけていくことで、教育にも専念できると思われる。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	協働の意識をさらに高め、校務分掌を明確にして、効率的な業務の遂行ができるように改善を進めていきたい。			